

氏名（本籍）	喜 ^キ 多 ^タ 祥 ^{ヨシ} 泰 ^{ヒロ} （茨城県）
学位の種類	博士（美術）
学位記番号	博美第151号
学位授与年月日	平成18年3月24日
学位論文等題目	〈作品〉変容する森 〈論文〉森－連動し合い、反響し合い、取り組む合い存在－

論文等審査委員

（主査）	東京芸術大学	助教授	（美術学部）	齋藤典彦
（論文第1副査）	〃	〃	（ 〃 ）	佐藤道信
（作品第1副査）	〃	教授	（ 〃 ）	堀越保二
（副査）	〃	〃	（ 〃 ）	関出

（論文内容の要旨）

まぎれもなく人間は動物である。太古の昔、人類は周囲の厳しい環境の中で、すべての動物がそうするように、必死に生活していた。その中で、言葉を覚え、道具を使い、想像すら出来ないほどの膨大な時間の中で、知識と技術を蓄積し、文字を創り、文明を構築してきた。とくに情報を記録することで、環境に適応する技術（道具の使い方や効率よく生活力を向上させる知恵）や、生存し続けるためのルール（社会生活の上で秩序をたもつ知恵）を積み重ね、現代の私たちの社会に至った。人間は記録することによって、文明を持つ動物となった。

そして、営みの中で記録されてきた行為は、用の美として、物としての機能と存在価値をも現代に伝えて残っている。知と技の結晶である造形行為には、美しさと存在することの価値が明確にあった。

しかし、ことばに始まり、文字の発明・造形行為と、ゆっくりと進んできた情報の蓄積は、都市化や、文明の進展にともない加速を続けた。現代にいたっては、高度な情報機器と様々な通信機器を使用することで、社会にはかつて無いほどの情報があふれ、私たちはそれを記録し、把握することも可能になっている。情報を収集しようと特別に意図しなくても、新聞やラジオ・テレビを見れば、世界で今何が起きているのか、おおよその流れを知ることが出来る。同時に、生きていくために必要なさそうな情報も、数多く目にし、聞くことになる。以前よりも格段に豊富な情報の中で生活する私たちだが、情報が増えるにともない、ひとつひとつの価値は逆に薄くなり続けている。加速する情報は、活字からさらにデジタル化され、多量かつ高速の流通へと社会の価値が移行することで、情報は記号化してきている。

そして、より早く効率的に進む社会活動のなかでは、即座に、より多くの人に理解される表現が好まれる。テレビのコマーシャルなら15秒、看板なら一瞬で情報を伝えなければならない。土地や人間関係など、周囲の環境の中で営まれた昔の生活とは違い、情報を中心とする現代の都市では、スロウで高価な造形より、大量生産の安価なもので十分なかもしれない。

このような現代社会において、造形行為は、どのような位置にあるのだろうか。また、造形行為を続ける意味とは何なのだろうか。本論文は、この疑問に端を発し、制作を続ける中で気付いたことの積み重なりの中から生じた、“記憶”というテーマについて論考している。

第1章では、法隆寺回廊見学の体験が、私に与えた影響について論じた。回廊の悠々とした佇まいに受けた衝撃は、必然的なものであった。そこには、美しいことと存在することが内在しており、太古から私たちが憧れ、模倣してきたフルクタル・カオス形が存在していた。制作の型に疑問と違和感を抱いていた私は、そのフルクタル・カオス形の力強さに、制作の可能性を感じ、傾斜していった。

こうして制作の起点を模索していた私に、「森」ということばが意味を成してきた。一見、何の関連性もない作品に、共通した原風景があることに気付き、自分の趣向が、過去の経験や記憶の集積から成りたっていることに驚いた。何かを表現する過程で、私の中で様々なことが関係し合い、一つの方法を選択していく。その選択のひとつひとつに、記憶の蓄積からなる混沌とした固まり（森）が、うっすらとしみだし影響している。第2章では、幾多の経験と認識の積み重なりである記憶を、「思い出す」行為と、その造形過程での様々な相互作用から、フルクタル・カオスの森として論じた。

第3章では、記憶の変容と、記憶のシステムについて論じた。

普段私たちは、記憶ということばで表される脳の機能を思考に組み込み、生活している。しかし、保存された記憶は、一定の割合で消えていくばかりか、内容も変わっていく。あとの出来事の登場によって、前の出来事の重要度が変わり、多かれ少なかれ覚えておきやすい形に整えられるのだ。このとき、似たような出来事が融合され、部分部分は正確であっても、全体としては不正確なひとつの記憶ができあがる。ここに、記憶のフルクタル・カオス性を見て取れる。

この記憶のシステムは、脳の整理・精神のバランスを保つために、常用で必要な機能である。確かに、思い出す行為も、正確に記憶を反芻しているものではない。学説のとおり、思い出すものは、現在の私のフィルターを通して変化している。しかし、現在の自分から遠い記憶を思い出そうとするにしたがって、記憶の書き換えによって、変化する自分に気付き、それがまた自己化していく記憶システムの絶妙なバランスを感じた。記憶という思考と成長に深く関わる機能は、生活や、制作を通した作品との相互作用の中で、変容し続ける私自身であると思う。制作も含め、人の営みすべてを造形とみなすなら、造形が続くかぎり、私の中心は動き続け変容し続ける。

制作に常に関わり、内部から染み出す記憶は、森のように境界があいまいだ。森は、木などの様々な植物、多種にわたる動物や昆虫、地中の菌や土など、膨大な生物・有機物からなる固まりとして存在する。その固まりを形成する生物は、固体として見ても集団として見ても、その内部の様々なレベルで、つねに各種の相互作用を通して自らを維持している。同様に記憶のシステムも、認知と錯誤の矛盾を抱えながら変容し続ける。外部に対して開いたシステムなのである。

第4章では、身体を通して感じる記憶、そしてその土壌にある記憶について論考した。

泥遊びをした子どもの頃の記憶が、絵の具をといているときに、ふいに蘇ることがある。このとき、当時の視線の高さの映像など、断片的な記憶が集まり、泥遊びの記憶となって再現される。一方、身体はボールいっぱいの絵の具をこね続け、行為の再現と継続を続ける。そして、それをまた記憶する。造形することを通して、頭と手が繋がりがぐるぐる回る。この身体に関わるアナログな記憶過程が、私の制作と切り離せない。森や記憶にフルクタル・カオスのシステムが存在するように、造形と私の関わりにも、森や記憶が内在する。

このような森に関する制作が、私と周囲に蓄積されている記憶と行為の存在と、日本画という物質的な絵画の伝統的な手法のすばらしさ、そして同時にもどかしさにも気付かせてくれた。日本では、江戸時代以降、制度化社会が進み、遠のいていく肉体に反して、進み続ける情報化によって、時間と身体の密接な関わりが薄れてきた。

しかし、記憶と行為の蓄積である造形行為や、開いたシステムである身体、またそれらが森のように複雑な相互関係の中で存在する社会の中で、生きたシステムは変容を続ける。廻廊をきっかけに、フルクタル・カオスを理解してきたように、造形を通して、記憶は、連動し合い、反響し合い、取りこみ合う可能性を秘めていることを認識するようになった。

造形には身体による痕跡が残る。じんわりと伝わる身体の記憶は、身体から造形、造形から身体へと循環し続ける。確かにそこで造形は、情報として、つまり“点”として存在する。しかし、“動く”存在である私たちの記憶の中で、点は線になり、形をえて残っていく。私が、様々な方と関わり経験と認識を重ねながら成長してきたように、変容しながらも開いた存在として、絵を描いていかねばと思う。そ

して廻廊のように、様々な人を通して、連動し合い、反響し合い、取りこみ合う絵をかきたい。そうすることで、ここまで続けてきた、この記憶によるつながりを、続けていかねばと思う。変容しながらも開かれた存在として、作品をつくり、造形を続けていかねばと思う。私自身が、さまざまな人による造形であり、これまでもこれからもずっと続いていくことなのだから。